

人物像から見た『明六雑誌』

松本佳奈

雑誌；19世紀；明治時代；フィロソフグラフィ

背景・目的：明六社の雑誌『明六雑誌』について調査、分析することによって、日本の近代化に果たした役割を人物像を中心に考察した。明六社は明治6(1874)年に森有礼の提唱で作られた学術結社で、明六社から出版された『明六雑誌』は、日本最初の学術雑誌とされている。この『明六雑誌』の執筆者に焦点をあて、人物関係を調査することによって、明六社『明六雑誌』はどのような集団、雑誌だったのか分析する。

方法：(1)明治期の出版物に関する調査をし、『明六雑誌』の出版を取り巻く状況を明らかにする。(2)人物事典を利用して、『明六雑誌』の論文執筆者の履歴を調査し人物像を明らかにする。

結果：(1)明治期には『明六雑誌』の他にも雑誌が発行されていた。また明治政府は「新聞紙印行条例(1869)」などの出版に関する法律を定めていた。(2)『明六雑誌』の執筆者は同じ師を持ついくつかのグループに分けることができた。①緒方洪庵を師とする蘭学派のグループ。②佐久間象山を師とする西洋兵学グループ。③箕作阮甫を師とする蘭学—洋学派グループ。④オランダのフィッセリングを師とする蘭学派の人物。⑤杉田成卿を師とする蘭学派の人物。⑥手塚律蔵を師とする蘭学派の人物。⑦明六社の論文執筆者と繋がっていない独立した洋学派／英学派／儒学派の人物。これらのグループは蘭学などの学問のルーツから7種類、9つに分けることができた。海外渡航先もヨーロッパ、アメリカが中心となっており、同じ使節や留学による同期のつながりもあった。

考察：(1)明治期の出版状況は変化が激しく、資金難や明治政府による規制によって発刊と廃刊がくり返されていたと考えられる。(2)『明六雑誌』は様々な背景や関心を持った人物が一つの雑誌に論文を掲載し、意見の対立する人物が違う意見を同じ誌面上に掲載することを認めており、そのことに価値をおいていたと考えられる。演説や対話、討論による合意形成を求める西欧民主主義的なスタイルが見られた。

結論：『明六雑誌』は多様な背景を持った様々な学派を持つ人物によって作られた雑誌であり、現在の専門的な学術雑誌の規格に当てはまらないが、総合的な雑誌として成り立っていたと考えられる。民間の集団である明六社でのつながりが後に東京学士会院（現在の日本学士院）へと引き継がれており、明六社の関係性が名称をかえて持続されたことになる。

『明六雑誌』の執筆者の多くは幼少期に藩校、郷校などで、伝統的な儒教や漢学といった学問を修めている点は注意すべきである。